

大学入学共通テストにおけるスピーキングテスト導入の問題点 —受験者の視点から—

黒川 智史¹

¹名古屋大学 言語教育センター 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

E-mail: ¹skurokawa0521ut@gmail.com

あらまし 本研究は、大学受験を経験した大学1年生63名に参加してもらい、受験したことのある英語民間試験の種類、久世(2018)の不安対になる項目として、スピーキング能力の自己評価(6件法)を質問した。そして、英語民間試験を受けたいかを、「はい」、「いいえ」の極性疑問文で提示した。最後にその理由を自由記述形式で質問した。調査の結果、英語民間試験のスピーキングテストを大学入学共通テストで受けたくないとした「導入反対群」が66%いることが示され、「導入賛成群」は34%であった。そして、「導入賛成群」と「導入反対群」の間に「英語民間試験の受験数」、「スピーキング能力の自己評価」に差があるのかをt検定で求めた結果、「英語民間試験の受験数」($t(61) = -2.62, p < .01$)、「スピーキング能力の自己評価」($t(61) = -2.72, p < .05$)には有意な差があることが示され、効果量(d)もそれぞれ中程度であった。

キーワード 英語民間試験導入, スピーキングテスト, Test-taker, 大学入学共通テスト, 高校の英語教育

The Problem of Introducing Speaking Test at Universities' Entrance Exam —The Quantitative Analysis on the Test-taker's Point of View—

Satoshi KUROKAWA¹

¹ Language Education Center, Nagoya University 1, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8603, JAPAN

E-mail: ¹skurokawa0521ut@gmail.com,

Abstract The Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology (MEXT) was planning to introduce a speaking test as part of the Common Test for admission to Japanese universities. Many researchers have written about discussions at the Cabinet level and within MEXT; however, few have analyzed the perspectives of test-takers or conducted quantitative research on them, except for Kuze (2018). Therefore, this paper examined the differences between participants who were willing to take speaking tests as part of the university entrance examination and those who were not. 63 first-year students who had taken the university entrance exam participated in this research. The results showed that 20 participants supported taking speaking tests, while 43 opposed them and rated their speaking ability significantly higher ($t(61) = -2.72, p < .05$) than the opponents. Free responses from opponents of the test suggested concerns about the fairness of the speaking tests and the additional burden of preparing for entrance exams.

Keywords Commercial Test, Speaking Test, Test-taker, Entrance Exam, High School English Education in Japan

1. はじめに

英語の4技能を測るために、英語民間試験のスコアを大学入学共通テスト(以下、共通テスト)で活用する、「大学入試英語成績提供システム」の導入(以下、英語民間試験導入)が2014年ごろから本格的に検討されてきたが、2021年7月に断念された。その間、英語民間試験導入の問題は、主に共通テストでスピーキングテ

ストが実施されることを中心に、さまざまな議論が行われてきた(阿部, 2017; 関口・斉田, 2018; 宮本, 2018; 南風原, 2018; 羽藤, 2019; 鳥飼, 2021)。英語民間試験導入が断念された原因として、官邸主導の英語教育政策の問題(鳥飼, 2021)や、文部科学省が示したガイドラインおよび制度設計上の問題(南風原, 2018)、国立大学協会や大学、高校側からの制度への批判が相次いだこと

黒川智史, “大学入学共通テストにおけるスピーキングテスト導入の問題点—受験者の視点から—”,
言語学習と教育言語学 2024 年度版, pp. 17-25,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編集, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2025年3月31日。

Copyright © 2024-25 by Kurokawa S. All rights reserved.

(宮本, 2018;羽藤, 2019)などが挙げられる。

一方で東京都立高校の入学試験の一環として「ESAT-J (English Speaking Achievement Test for Junior high school students)」を都内の中学3年生を対象として導入されている。大学個別入試においては、東京外国語大学がブリティッシュ・カウンシルと協力して、「英語スピーキング試験(BCT-S)」を作成し、2022年度一般選抜前期日程試験から全学部での導入している。このように、一部の入試においてスピーキングテストが導入されており、今後共通テストの枠組みで英語4技能を測定する試みが再度検討される可能性がある。

しかしながら、最も影響を受けるはずの受験者側の視点から英語民間試験をどのように考えているかあまり調査されていない。したがって本研究では、実際に受験を経験した大学1年生を対象に調査し、共通テストにおけるスピーキングテスト導入問題をより多面的に考察できることにつながるだろう。

2. 先行研究

2.1. 英語民間試験導入経緯

鳥飼(2021)は、現在に至るまで繰り返されている英語教育の「抜本的改革」の下地は、臨時教育審議会であると指摘している(p.164)。同答申では「大学入試において、TOEFLなどの検定試験の結果の利用も考慮する」ことが必要であるとされていた。そして、臨時教育審議会第二次答申では、「各学校段階における英語教育の目的の明確化、学習者の多様な能力・進路に適応した教育内容や方法の見直しを行う」と提案されていた。江利川(2018)は、「目的の明確化」については、「到達目標」を指していると解釈し、後の各種英語民間試験のスコアの明示化につながっていると述べている。事実、『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画(2003)』では、「日本人全体として、英検、TOEFL、TOEIC等客観的指標に基づいて世界平均水準の英語力を目指すことが重要である(p.1)」といった民間試験のスコアについて言及されている。

英語民間試験導入について大きな動きがあったのは、第二次安倍内閣発足からである。2013年4月8日に安倍内閣が閣議決定したことにより発足した教育再生実行本部より、「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言(2013)」が公表され、「1.英語教育の抜本的改革(p.3)」には、従来の入試の見直し、高校卒業段階でTOEFL iBT45点(英検2級)以上の英語力を全員が達成することが記された。その後、2013年6月14日に「第2期教育基本振興計画」が閣議決定され、同計画には「大学入試においても、高等学校段階で育成される英語力を適切に評価するため、TOEFL等外部検定試験の一層の活用を目指す」ことが記され

ている(2013 p.58)。2014年12月22日付の中央教育審議会の答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」にて、「特に英語については、4技能を総合的に評価できる問題の出題(例えば記述式問題など)や民間の資格・検定試験の活用により、「読む」「聞く」だけでなく、「書く」「話す」も含めた英語の能力をバランス良く評価する(p.15)」と記されていた。その後1年間の議論を経て、「高大接続システム改革会議」の最終報告書(2016)では、センター試験に代えて「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を導入することが記されており、後の共通テストの導入が検討された。その後、「第2回の高大接続改革会議の進捗状況について」A案とB案が提示された。A案は、平成32(2020)年度以降、共通テストの英語試験を実施せずに、認定試験、つまり英語民間試験のスコアを活用する方針を指しており、B案は、大幅な制度変更を考慮し、平成35(2023)年度までは共通テストと英語民間試験のスコアを活用することのいずれか、もしくは双方を選択利用することが記されていた。

2016年6月14日付の国大協による『「高大接続改革の進捗状況について」に対する意見』などの意見が出た。しかしながら、国大協の意見について、直接文部科学省が声明を出さなかったものの、2017年7月13日に公表した「大学入学共通テスト実施方針」において、B案が採択されたことが判明した。このB案は、2023年度の共通テストまでの移行期間として共通テストと英語民間試験が併用される、という案であるため、2024年度入試からどのような制度で実施されるかについて議論されてきた。

しかし、英語民間試験導入には様々な問題点が高校、大学の関係者に指摘され、2019年8月30日以降、英語民間試験導入中止のデモが行われたこともあった。その後も10月24日に萩生田文部科学大臣が、受験生の機会平等を軽視するような発言、いわゆる「身の丈発言」があり、高校教師や受験生およびその保護者から批判されていた。

2019年11月1日に萩生田大臣が英語民間試験導入を見送ることを発表する。そして、2021年7月には「大学入試のあり方に関する検討会議」の審議を経て、「技術の飛躍的進展や社会の理解がない限り困難であると言わざるを得ない(p.26)」という提言(2021)が出たため、英語民間試験導入が断念されることが正式に発表された。

2.2. 英語民間試験導入についての議論

宮本(2018)は高等学校の教員の立場から4技能を大学入試で評価するという全体の方向性については否定できないと述べている。また小泉(2019)は、スピーキン

グテスト導入による学校教育への正の波及効果があると述べている。それゆえ、前述の BCT-S や ESAT-J のように、現在入試としてスピーキングテストが導入されている例もある。

その一方で、国立大学協会(2017)は、学習指導要領との実際の整合性可能性に難色を示している。また、実施場所の確保、セキュリティや信頼性等を担保すること、受験料の負担軽減方策や障害のある受験者のための環境整備策などを高大接続会議に対して促していた(国立大学協会, 2017)。しかし、文部科学省の審議では受験地や受験料の問題が、会議においてほとんど議論されていなかったことが批判されている(南風原, 2018)。羽藤(2019)は、英語民間試験活用に対して、「構造的欠陥」があると指摘しており、例えば、受験場所、受験値の問題に加えて、通常は英語民間試験団体がその採点ノウハウを外部に公表していないため、なぜその点数が付けられたのかブラックボックス化してしまうことなどを挙げている。関口・斉田(2018)のように、英語民間団体に委託することが、国が運営する試験として無責任であり、国が責任を持ってテストを運営すべきであるという批判もあった。日本学術会議(2020)では、英語民間試験を採用するのではなく、これまでセンター試験を実施してきた実績がある大学入試センターが責任を持って出題を可能にする体制を整えるべきであると主張している。

日本学術会議(2020)では、英語民間試験導入は、高校・大学の教育現場の声が反映されていなかったことを指摘しており、国公立の高校・大学の代表団体が、各高校、大学で実際に教えている現場の意見を十分にヒアリングし、会議で反映させるべきであると述べており、方針決定後にパブリックコメントを募るのではなく、より早い段階から検討過程を公表し、フィードバックを得て、当事者の意見を反映させた検討体制を整えることが必要であると提言している。実際に「大学入試のあり方に関する検討会議 提言(2021)」では、英語民間試験導入反対の研究者も協議に参加し、パブリックコメントも検討会議の途中で募集し、会議に反映させている。

このように教育現場やステークホルダーの意見が議論に反映されなかった結果、英語民間試験導入は断念されたことが示されている。事実、「大学入試のあり方に関する検討会議 提言(2021)」では、「2.これまでの教訓を踏まえた大学入学者選抜の改善に係る意思決定のあり方(p.4)」について、(1)議論の透明性、データやエビデンスの重視、多様な意思聴取、(2)実現可能性の確認、工程の柔軟な見直し、(3)高等学校教育から大学教育までの全体を視野に入れた検討の必要性が述べられている。

とりわけ(3)高等学校教育から大学教育までの全体を視野に入れた検討については、まだあまり定量的な調査が実施されていない。例えば、久世(2018)では、都内高校の教師、生徒、保護者を対象とした調査を行っており、「授業が民間試験対策中心になる」、「受験料も高く公平性が保てない」ことについては、高校教師が危惧している一方で、生徒やその保護者はあまり問題視しておらず、調査当初は制度も定まっておらず受験生として実感がなかったことが示されている。久世(2018)の都内 A 高校 1 年生の生徒の反応(N=247)では、英語民家試験導入についての不安について質問していた。その結果、「不安はない(12名、4.9%)」、「あまり不安はない(22名、8.9%)」、「どちらともいえない(81名、32.6%)」、「不安である(83名、33.6%)」、「かなり不安である(46名、18.6%)」であった。そのうち、英語民間試験導入に「不安である」「かなり不安である」と答えた 129 名の生徒は、「部活動や学校行事と両立できるか」に 54 名、「合否判定での公平性が保てるのか」に 20 名が回答していた(久世, 2018)。

久世(2018)のデータは、本来英語民間試験が導入された場合、第 1 期目に該当する学年であった、都内の高校 1 年生を対象にしていた。その時点では、まだ大学受験に関してあまり理解していない参加者であったと考察される。そのため、大学受験を経験した大学生を対象に調査することで、久世(2018)の結果を補うことができると考えられる。したがって、本稿では一部の大学生を対象にスピーキングテストを共通テストの枠組みで受けたいかを質問紙調査を実施し、スピーキングテスト導入問題をより多面的に考察する。

3. 実験

3.1. 参加者

63 名が本実験に参加した。実際の受験期の生徒を対象とした実験は困難であること、受験を経験してから年月が経ちすぎると振り返るのも困難であることから、今回の参加者は全て都内の中堅レベルの私立大学の 1 年生であった。質問紙は、履修の都合上ランダムに分けられた 3 つの英語クラスで配布され、第 1 回目の授業の最後に配布し、これらの回答は、授業評価とは一切関係ないことを口頭および書面の両方で伝えた。

3.2. 質問紙と質問内容

質問紙は、Google Form を用いて収集した。久世の研究では、高校 1 年生を対象にしていたため、英語民間試験導入で有利になる受験者の特性と考えられる、英語民間試験の受験経験や、高校時代に培った自身のスピーキング能力にどの程度自信があるのかに答えることは難しかった。さらに、久世(2018)が述べている「入試に対する不安」ではなく、より具体的に英語民間試

験、とりわけスピーキングテストを受けたいかを直接答えてもらうことにする。それによって、なぜそのように考えているのかを自由記述で記入してもらうことが有効になると考えられる。選択式ではなく、自由記述にすることで、受験を経験した学生の意見が少ないため、今後の質問紙調査の基礎になるためである。

そこで本研究は、以下の質問を参加者に回答してもらった。受験生としてスピーキングテストを受けたいかについては、具体的な場面を想定してもらうために、「今後、大学共通テストでは英語民間試験(英検、IELTS、TOEFL など)のスコアが活用される可能性があります。英語民間試験活用の目的の1つとして大学入試においてスピーキング能力を評価することがあります。もしあなたが受験生なら、大学共通テストでスピーキングテストを受けたいですか?」とし、その質問に対する自由記述は「上記であなたがその選択肢を選んだ理由を詳しく教えてください」とした。そして、英語民間試験の受験経験や、受験したことがある英語民間試験の種類(複数回答可能)を質問した。そして久世(2018)の不安に対する項目として、スピーキング能力の自己評価を「あなたのスピーキング能力の自己評価をおしえてください」文言で「全く自信が持てない」を1とし、「とても自信がある」を6として6件法で質問した。

4. 結果

まず、スピーキングの自己評価は、平均 1.63、標準偏差 0.82 であった。自己評価が「そう思う」、「とてもそう思う」を記入した参加者はいなかった(表 1)。

表 1 スピーキング自己評価(名)

全くそう思わない	34
そう思わない	21
あまりそう思わない	5
少しそう思う	3
そう思う	0
とてもそう思う	0
平均	1.63
標準偏差	0.82

1名の参加者が英語民間試験の受験したことがある種類ごと示したのが表 2 である。平均 1.65、標準偏差 0.9 であった。参加者が受験したことがある英語民間試験を示したのが表 3 である。最も多かったのが、実用英語技能検定(英検)(58)であり、次点で GTEC(22)であっ

た。

表 2 参加者が受験したことがある英語民間試験の種類

5 個以上	1
4 個以上	2
3 個以上	4
2 個以上	23
1 個以上	32
0 回	1
平均	1.65
標準偏差	0.9

表 3 参加者が受験したことがある英語民間試験(複数回答可)

検定試験の名前	数
実用英語技能検定(英検)	58
IELTS	0
TOEFL iBT	5
TOEIC Listening & Reading	0
TOEIC Speaking & Writing	8
ケンブリッジ英検	1
GTEC	22
TEAP	2
TEAP CBT	0
合計	96
一名当たりの受験数	1.52

共通テストの枠組みでスピーキングテストを受けたいと答えた参加者(導入賛成群)が、20名(34%)であった。一方で、受けたくないと答えた参加者(導入反対群)が43名(66%)であった(表 4)。

表 4 共通テストの枠組みでスピーキングテストを受けたいか

	人数	割合
受けたい(導入賛成群)	20	34%
受けたくない(導入反対群)	43	66%
合計	63	100%

次に「導入賛成群」、「導入反対群」にそれぞれその理由を自由記述で記入してもらった。「導入賛成群」の主な記述は、「大学共通テストでスコアが使われるなら受けたと思ったから(Y9)」、「受験に有利になるから(Y11)」など「受験が有利になるため」という記述や、「スピーキングとリスニングだけは自信があるため(Y2)」など「スピーキングに自信があり、実力を測りたい」という記述が最も多かった(6名)あった。他にも「自分のスピーキング力を高めたいから(Y6)」、「その対策をするようになれば必然的にスピーキング力が上がるから(Y19)」など「受験にあるとスピーキング能力が上がるため」という記述もあった。また、「数学や社会よりも実用的だし、それで評価されるのは正しいことだと思うから(Y7)」など「将来の実用性」について記述している(表5)。

表5 「導入賛成群」の主な記述概要

内容	割合	記述データ
受験が有利になるため	15%	Y9, Y11, Y14,
スピーキングに自信があり、実力を測りたい	30%	Y1, Y2, Y10, Y15, Y16, Y20
受験にあるとスピーキング能力が上がるため	10%	Y6, Y19
将来の実用性	25%	Y3, Y7, Y8, Y12, Y18

一方で、表6の「導入反対群」では、「スピーキングが苦手だから(N5)」を筆頭に「スピーキングが苦手、自信がない」という記述が最も多かった。「独学での勉強が難しいと思うから(N4)」「大学受験はどれだけ自分が頑張ることができるか測るものだと考えているから(N10)」など「大学受験の科目としてふさわしくない」という記述もあった。また、「ネイティブに有利になりすぎるのではないかと思う(N9)」、「監督者によって点数評価に差が出そうだから(N23)」、「採点の人それぞれで正確な答えがないから(N30)」など「採点の妥当性・信頼性・公平性」に関する記述もあった。そして、「英語がもともと苦手なのにスピーキングも追加されたら自分的にきつい(N3)」、「勉強しなければならないことが増えるから(N12)」、「英語がまず苦手なのに、スピーキングまで増えたら対応しきれない(N13)」「speaking以外でいっぱいなのでこれ以上負担を増やしたくないため(N40)」など「学習量の増大に対する懸念」

が記述された。

表6 「導入反対群」の主な記述概要

	割合	記述
スピーキングが苦手、自信がない	58%	N2, N5, N6, N7, N8, N11, N14, N15, N16, N17, N18, N19, N20, N24, N27, N28, N31, N32, N33, N35, N38, N39, N41, N42, N43
大学受験の科目としてふさわしくない	5%	N4, N10
採点の妥当性・信頼性・公平性	7%	N9, N23, N30
学習量の増大に対する懸念	25%	N3, N11, N12, N13, N21, N25, N26, N34, N36, N37, N40

そして、「導入賛成群」と「導入反対群」の「英語民間試験の受験数」、「スピーキング能力の自己評価」、「受験期のスピーキング授業の頻度」の平均と標準偏差は、表7にある通りである。いずれも「導入賛成群」の平均が、「導入反対群」の平均を上回っていることが確認できた。

表7 「導入賛成群」と「導入反対群」の平均および標準偏差

	導入賛成群		導入反対群	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
英語民間試験の受験数	2.05	1.19	1.46	0.66
スピーキング能力の自己評価	2	0.97	1.46	0.7

最後に平均と標準偏差をもとに、「導入賛成群」と「導入反対群」の間には、「英語民間試験の受験数」、「スピーキング能力の自己評価」、「受験期のスピーキング授業の頻度」に差があるのかをt検定で検証した(表8)。t検定の結果、「導入賛成群」と「導入反対群」の「英語民間試験の受験数」($t(61) = -2.62, p < .01$)、および「スピーキングテストの自己評価」($t(61) = -2.72, p < .05$)に有意な差があることが示された。

なお、効果量(d)はそれぞれ、0.62、0.67であり、中程度であった。

表8 「導入賛成群」と「導入反対群」間の差の検定

	t 値	P 値	信頼区 間	効果 量(<i>d</i>)	効果量の 判定
英語民間 試験の受 験数	-2.62	0.01	$p < .05$	0.62	効果量中
スピーキ ングの自 己評価	-2.72	0.008	$P < .05$	0.67	効果量中

5. 議論

調査の結果、本研究では、英語民間試験のスピーキングテストを共通テストで受けたくないと感じた「導入反対群」が66%いることが示され、「導入賛成群」は34%であった。

そして、「導入賛成群」と「導入反対群」の間に「英語民間試験の受験数」、「スピーキング能力の自己評価」、「受験期スピーキング授業の頻度」に差があるのかをt検定で求めた結果、「英語民間試験の受験数」($t(61) = -2.62, p < .01$)、「スピーキング能力の自己評価」($t(61) = -2.72, p < .05$)には有意な差があることが示され、効果量(*d*)もそれぞれ中程度であった。

このことから、様々な種類の英語民間試験を受験し、スピーキングの自己評価が高い学生が、よりスピーキングテストを導入に賛成と考えていることが示唆されている。その理由は自由記述式で、「導入賛成群」には、「受験が有利になるため」、「スピーキングに自信があり、実力を測りたい」、「受験にあるとスピーキング能力が上がるため」、「将来の実用性」という記述があった。これらは、スピーキングテスト導入による正の波及効果を期待していると考察される。

また、「導入反対群」は、「スピーキングが苦手、自信がない」、「大学受験の科目としてふさわしくない」、「採点の妥当性・信頼性・公平性」、「学習量の増大に対する懸念」という記述が確認された。久世(2018)が実施した質問紙でも同様に、英語民間試験導入に不安を示した129名の生徒は、「部活動や学校行事と両立できるか」に54名、「合否判定での公平性が保てるのか」に20名が回答していた。このことから、共通テストの枠組みでスピーキングテストを導入していくには、本研究で示された「学習量の増大に対する不安」を取り除く必要性が示された。

したがって、「大学入試のあり方に関する検討会議提言(2021)」の(2)実現可能性の確認、工程の柔軟な見直しとして考えるならば、例えば、トータルの学習量を大きく変えないためにも、実際にスピーキングテス

トを導入するには、リーディングやリスニングの問題数や配点を抑えて、ある程度スピーキングの配点を多くする必要も示唆されている。

他にも、現行学習指導要領では英語で「話すこと(発表・やりとり)」が重視されているにもかかわらず、「スピーキングが苦手、自信がない」という記述が多かった(26名)。このことから、スピーキング活動だけでなく、スピーキングテストに慣れてない可能性が示唆されている。そのため、スピーキングテストの実施数も高校教育で重視していかななくてはならないだろう。したがって、どのようなやり方でスピーキングテストの実施数を増やしていくか今後検討すべきである。

また、今回の参加者は対面式のスピーキングテストである実用英語技能検定(58名)が圧倒的に多かった。共通テストの性質上、50万人程度が受験することが見込まれるため、スピーキングテストを対面で実施することは困難である。現状、受験者に同時に受験させることができる、ESAT-Jのようなタブレットを用いたスピーキングテストの実施方法が、共通テストの枠組みで実施するには実現可能な方法であると考えられる。そのため、実用英語技能検定に慣れている学習者が多いということは、タブレット形式には不慣れな可能性がある。したがって、今後スピーキングテストを共通テストの枠組みに取り入れる際には、実際に受験者がどのような試験を受けているのかを確認した上で、タブレットを用いた方法を検討すべきであろう。

そして「大学受験の科目としてふさわしくない」という記述については、大学受験が基本的に独学で伸ばせる能力を測定するものである、という参加者の受験観を示している。この点については、スピーキングテスト導入により、地方では国立大学協会(2017)が指摘したように、受験場所が確保できず、より広がるのではないかという懸念が示されたことはあったが、このような受験観はこれまでの英語民間試験導入問題の議論にほとんど上がってこなかった観点であった。

このように、学生が共通テストにおけるスピーキングテスト導入に賛成か反対かを判断する要因には、ただ単なる個人の受験の有利不利だけで導入の是非を考えているのではなく、スピーキングテスト導入の正の波及効果を期待している意見や、受験としての公平性に対する懸念が示されていることが確認された。スピーキングテスト導入の正の波及効果については、小泉(2019)が述べており、受験の公平性に対する懸念は、国立大学協会(2017)や羽藤(2019)が述べている。つまり、これまで英語民間試験導入に対する議論でも度々論じられている主張と、受験生という立場を経験した学生の主張は大きくかけ離れていないことが示された。また、前述の通り、受験観についてなど新たな視点が示

されている。したがって、今後共通テストにおけるスピーキングテスト導入について検討する際には、「大学入試のあり方に関する検討会議 提言 (2021)」の(3)高等学校教育から大学教育までの全体を視野に入れた検討として考えるならば、従来の高校、大学の教育関係者や保護者だけでなく、大学受験を経験した大学生の意見もテスト作成上重要なものとして取り入れるべきであると示唆された。

6. 今後の課題

本稿では一部の大学生を対象にスピーキングテストを共通テストの枠組みで受けたいかを質問紙調査を実施し、スピーキングテスト導入問題をより多面的に考察した。今後の課題としては、1 個人の中に、受験者として評価を受ける立場と、社会におけるスピーキングテストのあり方についての立場は一致しないこともあるため、今後そのギャップを埋める議論も必要になるだろう。例えば、個人の立場と社会の側面を分けて意見を聞く必要があるだろう。1 つの大学のみでデータを集めている点が挙げられる。大学ごとに傾向が異なる可能性もあるため、再度データを集める時には、より広範囲でのデータ収集が求められる。また、今回の参加者の中にも、推薦入試の学生が含まれて否可能性も否定できない。参加者の受験方式を確認すれば、より一層深い考察が可能になることであろう。さらに、英語検定試験でどの程度スピーキング能力を有しているのかを比較することも、今後の定量的調査では重要になるだろう。

このように本研究にはさまざまな課題があったものの、本研究が示した、受験生側の視点は、今後共通テストにおけるスピーキングテスト導入を検討する上で重要なステークホルダーである。したがって、今後の研究においても調査すべきであるだろう。

参 考 文 献

阿部公彦 (2017)「史上最悪の英語政策：ウソだらけの『4 技能』看板」 ひつじ書房

関口友子・斉田智里 (2018)「センター試験英語はそれほど悪いテストか?—『論証に基づく妥当性検証』の試み—」『関東甲信越英語教育学会第 42 回栃木研究大会予稿集』 21-21.

宮本久也 (2018)「これからの大学入学者選抜に望むこと」東京大学高大接続研究開発センター「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」『東京大学高大接続研究開発センター』 from <http://www.ct.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2021/1/koudai-sympo2018-report.pdf>

南風原朝和 (2018)「英語入試改革の現状と共通テスト

のゆくえ」南風原朝和 (編)『検定・迷走する英語入試・スピーキング導入と民間委託』岩波文庫

羽藤由美 (2019)「2020 年度英語入試改革の構造的欠陥」『指導と評価』 11, 9-12.

鳥飼玖美子 (2021)「英語教育政策に見る歴史の忘却と歪曲—大学入試改革を事例として—」『英語教育の歴史に学び・現在を問い・未来を拓く：江利川春雄教授退職記念論集』 161-188.

江利川春雄 (2018)「日本の外国語教育政策史」 ひつじ書房

文部科学省 (2003)「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」『文部科学省 web ページ』 from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo/3/004/siryu/04031601/005.pdf

教育再生実行本部 (2013)「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」『自由民主党 web ページ』 from https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/pdf112_1.pdf

文部科学省(2013)「第 2 期教育基本振興計画」『文部科学省 web ページ』 from https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf

中央教育審議会 (2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について」『文部科学省 web ページ』 from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf

文部科学省 (2016 年 3 月 31 日)「高大接続システム改革会議『最終報告』」『文部科学省 web ページ』 from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf

文部科学省 (2021)「大学入試のあり方に関する検討会議 提言」『文部科学省 web ページ』 from https://www.mext.go.jp/content/20210707-mxt_daigakuc02-00016687_13.pdf

国立大学協会 (2017)「2020 年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—」『国立大学協会 web ページ』 from <http://img.p-kit.com/admission/shinnyuushi/1556670062093167200.pdf>

小泉利恵 (2019)「英語 4 技能テストの選び方と使い方-妥当性の観点から-」アルク出版

日本学術会議 (2020)「大学入試における英語試験のあり方についての提言」『日本学術会議 web ページ』 from <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-6.pdf>

久世恭子 (2018)「大学入学共通テストにおける英語試

Appendix.1 自由記述

Y=導入賛成と主張した参加者	N=導入反対と主張した参加者
Y1 自分の実力を測れるから	N5 スピーキングが苦手だから。
Y2 スピーキングとリスニングだけは自信があるため	N6 緊張して言葉が出てこなさそうだから
Y3 受けれるものは受けたほうが良いと思うから	N7 スピーキングは得意でないから
Y4 将来スピーキング能力が必要のなるので早いうちに学習したい	N8 スピーキングが苦手と感じているから。
Y5 今までやらなかったことにチャレンジしてみたいから	N9 ネイティブに有利になりすぎるのではないかと思う。
Y6 自分のスピーキング力を高めたいから	N10 大学受験はどれだけ自分が頑張ることができるか測るものだと考えているから。
Y7 数学や社会よりも実用的だし、それで評価されるのは正しいことだと思うから。	N11 まだ自分にスピーキングの実力があると思えないため、自信がないため。
Y8 自分のスキルにつながるから。	N12 勉強しなければならぬことが増えるから。
Y9 大学共通テストでスコアが使われるなら受けたらと思ったから。	N13 英語がまず苦手なのに、スピーキングまで増えたら対応しきれない
Y10 英語の能力を上達させたいから。	N14 スピーキングが苦手だから。
Y11 受験に有利になるから	N15 英語ができないから
Y12 可能性を広げたいから	N16 苦手だから
Y13 正直どちらでも良い	N17 自分自身が苦手だから。
Y14 点数が追加されるなら受けたほうが良いと思うから。	N18 スピーキングに自信がなく、合格が厳しくなりそうだから
Y15 実力をあげたい	N19 苦手で、点数が下がるから。
Y16 多少スピーキングの方が自信があるから	N20 英語を話すのが得意ではないから。
Y17 受けておきたい	N21 大学受験はすでに多くの勉強することがあり、スピーキングまでやるのはキャパオーバーだと思うから。
Y18 間違いなく将来役に立つことなので、早め早めに身につけておきたいから。	N22 難しいから。
Y19 その対策をするようになれば必然的にスピーキング力が上がるから。	N23 監督者によって点数評価に差が出そうだから。
Y20 評価されるのであれば自分の能力を知っておきたいと思うから	N24 苦手だから
N1 難しそうだから。(実際に留学などをしたほうが力になる。)	N25 高校で学ぶことが増えるから
N2 点数がとれなさそうなので	N26 その他の方式とは違い、特別な対策が必要だから
N3 英語がもともと苦手なのにスピーキングも追加されたら自分的にきつい	N27 苦手だから
N4 独学での勉強が難しいと思うから。	N28 苦手だから
	N29 滑舌が悪いから
	N30 採点の人がそれぞれで正確な答えがないから
	N31 スピーキングが苦手だから。
	N32 自信がないから
	N33 自身がない
	N34 勉強量が増えるから

- N35 自信がないから
 - N36 スピーキング以外で手いっぱいだから
 - N37 スピーキング能力に力を注いで他の技能がさがってしまうから
 - N38 話すことが苦手だから
 - N39 スピーキング能力に自信がないから
 - N40 speaking 以外でいっぱいいっぱいなのでこれ以上負担を増やしたくないため。
 - N41 一番苦手とする分野だから。
 - N42 苦手だから
 - N43 スピーキング能力に自信がないため
-